



佐藤全孝、一年ぶり二度目のステップス個展である。同じ描き方でも、前回に比べて滞っている風が抜けた。今回佐藤は、大型作品9点、小型作品5点を出品した。会場に入ると只ならぬ雰囲気醸し出されている。作品に近づくことができない。怯んでベランダで一服してから向き合った。それほどまでに「作品」という定義を超えている。「これは作品ではない」というのは通常は悪口だが、佐藤に対する私の発言は、現代美術を標榜する我々が如何に既成の「美術」から抜けている筈なのに囚われているかについての反省も込められている。「これは何だ」という驚愕こそ、現代美術が自らに課した使命ではないだろうか。素材、モチーフ、技法の工夫、歴史的背景と評価などかな

ぐり捨て、自己のイメージと格闘する姿が此処にある。現代美術はどのような角度からも見られるのが特徴であるが、今回の佐藤の作品は、真正面から見る以外に許されない。そしてその地点から作品と向き合うと、物凄くキツイ。一枚の作品であっても画面奥の闇の中へ果てしなく引き摺り込まれるようにも思えるし、表面が膨大して宇宙全てを包み込んでしまうのかという心地よさもある。自らの視線が佐藤のそれと一致し、佐藤の思考が垣間見える筈のだが、見る者は佐藤の視線から解放されて自らの視線を獲得し、自らの視線と自己が闘争を繰り広げることになるのだ。そのような厳しさと裏腹に、形容せずに本当に美しいと見惚れる私も同時にあるのだ。

